
魔法使いと星読みの晚餐

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと星読みの晩餐

【Nコード】

N42560

【作者名】

千葉

【あらすじ】

忙しい日々で心を亡くさないように

もう10月になるといつのに暑い日が続いている。

ここ数年夏だろうと冬だろうと、所構わず異常気象が続いているのだ。

夏の暑さは嫌いだ。この夏はじめじめとしていて性質が悪い。

かといって冬なら良いのかと問われれば、そういう訳でもなかった。暑さと同様寒さも簡単に堪えられるようなものではないし、雪など何度見ても大嫌いだ。

目の前にちらついた昨冬の粉雪の記憶を振り払うように、頭を軽く左右に振り、本来頭を使うべきところとは別のところへ行ってしまうていた思考を軌道修正する。

こここのところ仕事を立て込んでいて、寝る間を惜しむようにして働く日々が続いていた。

一度途切れてしまった集中力はなかなか回復しない。

それどころか、今まで少しも気にしていなかったようなところに意識を取られるようになってしまう。

長く伸びた前髪が目の前をちらちらと横切る様や、朝からデスクに張り付いていたためにガチガチに凝り固まり、鈍痛を訴えてくる肩や首などに。

すでに全身が疲労していた。無理にでも休暇を取り、一度身の回りを落着けた方がいい。今晚の夕食を摂るのを諦めれば時間が出来る。その時間を利用して、明日予定していた分にも少し手をつけてしまおう。そうすればその分、今晚はいつもよりゆっくりと眠る時

間が出来るだろう。

木製の椅子を引いて腰を上げると、目の前の棚にうず高く積まれた書類の山に手を伸ばした。山の中腹辺りを少し横にずらすと、目当ての物が顔を覗かせる。上に積まれた束を退かす手間がどうにも面倒に思われ、この山のまま何とかその一枚だけを引っ張り出せないものかと力を掛けてみた。グラリ、と何十枚もの紙が体を傾げたが、このまま慎重に行けばなんとかかなりそうだ。

慎重に力を加えながら、ズツ、ズツ、と徐々に紙切れを引き出していく。ようやく三分の二ほどが姿を表した。あと少し。この最後の一押しは、スピードをつけて引き抜いた方が懸命かも知れない。そう判断し、ラストスパートをかけるべく勢いよくその紙を引っ張った。

「シャウラ!!」

扉を勢いよく開けると同時に響く、甲高い青年の声。

突然のことに思わずびくりと肩が震え、それに伴い狂った手元は見当外れの力加減と方向に紙切れを引っ張った。上手く一枚だけ引き抜けるはずだったそれに付いてきてしまった大量の書類が、無残にばさばさと音を立てて棚から床へと滑り落ちていく。数瞬の間、部屋には重苦しい沈黙だけが広がった。

「…すいません、日を改めます。」

「待ちたまえ。何か用があつたのではないのか？」

沈黙を破つたのは訪問者の方だった。ほとんど声を発するのと同時にそそくさと扉を閉め出て行こうとする男を呼び止め、呆然と眺め

ていた書類から彼へと視線を移す。彼は罰の悪そうな顔をして、肩を竦めてみせた。

「いや… 本当になんでもないんです。それじゃあ失礼しました。」

彼は一息にそれだけ言うと、再び扉の向こうに逃げ込もうとする。私は右手を挙げ、その人差し指を今にも彼が姿を隠そうとしている扉に向けた。

「待てと言っているだろう。」

掲げた指先に神経を傾け一振りすれば、扉は独りでに動き出し、彼の身体を押し出すようにしながらたとえ軽い音を立て閉じ、逃げ道を塞いだ。彼は信じられないというような表情をしながら何度か扉を叩いたりして再びそれを開こうと努力していたが、びくともしないそれに諦めがついたのか、恨みがましい眼でこちらを睨んでいた。

「…卑怯だ！」

「喧しい。生まれもつての才能なのだ。」

続いて指を近くにあつた椅子へ向け、すーっと横に動かし彼の方へと移動させる。指の示した軌跡に従って、木製の椅子はギーッと音を立てながら彼の足元へと移動した。彼は呆然とその様を眺めている。

「座りたまえ。」

促すと、渋々といった様子で彼はそれに腰掛けた。それを見届けて

から、雪のようにそこかしこに降り積もった真白な書類を払いのけ、自分も元の椅子に腰を降ろす。

「それで、何の用だったのかね？」

しばらく待ったが彼の方からは何も言葉を紡がないので、痺れを切らしてそう問いかけた。膝に手をつき俯いていた彼は、答えることを更に少しの間躊躇していた。

「…今日は夕方から涼しくなるそうなので、久しぶりに外に夕食でも食べに行きませんかとお誘いに。」

「ほう。君がわざわざ私を誘いに来るとは珍しいな。また何かやらかしたのか？」

言いづらそうに呟かれた彼の言葉を受け、思わず顔が歪んだ。彼には思い出すのも忌々しいほどの前科が数々ある。院の所蔵していた図書を燃やされたこともあれば、私が大事にしていた研究資料の聖遺物を壊されたこともあった。

この前など、極東からやって来た商人の持ってきた珍しい観賞用の鳥をどうしても欲しいというので研究費用から金を出してやったら、世話を怠ったらしく、二週間後にはその鳥は見るも無残に衰弱していた。

私が必死に看病してやったにも関わらず、結局鳥はそれから三日後に死んだ。

彼が私を食事に誘いに来るのは、常にそのような私に報告しづらい失態を犯した後と決まっていた。今度は一体何をしかしたのか、不吉な予想が幾つも頭を駆け巡る。彼はまたしばらく黙っていたが、決心をつけるように大きく息を吐いた後、口火を切った。

「…前にシャウラが話してた、最近帝都で使われ始めたっていう新しい星読みの道具、やっぱり欲しいんだ。それで、飯でも食いながらだったら、シャウラもいつもより物分りがいいんじゃないかと思っ
て。」

「……あれは君が要らないと自分で言ったのだろう。都の遣いも帰ってしまったばかりだし、今更取り寄せるのは非常に困難だ。」

消え入りそうな小さな声で告げられた言葉に、私は思わず溜め息を吐いた。帝都から持ち込まれた新型の精巧なあの道具を紹介し、多少値は張るが、どうしても言うなら研究費用で購入してやろうと提案した私の好意を蹴ったのは彼自身だった。

しかも私がその話をしたのは一月も前の話だ。帝都からの遣いがここを去ったのは、一昨日の昼。ここまでタイミングが読めないとなると、もはや謀っているとは思えない。

「だってシャウラ、なんか恩着せがましい言い方するから、腹立つし。謝るからさ、ごめんな？帝都からの商人が半年に一回しか来ないのも知ってるよ、でもシャウラが頼めば何とかなるんだろ？だから…」

「よかるう。」

上目遣いにこちらを見やりながらの彼の言葉を遮ると、彼は電池の切れた玩具か何かのようにそのままの姿勢、そのままの表情で動きを止めた。

「…何だって？」

「夕食を摂りに行くのだろう。涼しくなるのなら良いだろう。今

から行くぞ。」

心底怪訝そうな表情でそう問う彼に言葉を返すと、彼は何とも言えない微妙な表情をした。椅子を引き立ち上がると、書類に埋もれた机の上を手探りする。無造作に放り出してあった一本の黒い紐を見つけ出し、書類の下から取り出したそれで伸び過ぎた髪を適当に結った。ひやりとした冷房の空気が首筋を掠める。部屋の中は空調のおかげで快適だが、一步外へ踏み出せばこの髪は汗でべとべとへばりつき、邪魔者以外の何者でもないのだ。どうやら、散髪に行く時間も作らなければならないらしい。

「何をしている、行くぞ。」

依然動きを止めたままの彼の前を通り過ぎ、扉を開ける。板一枚を隔てていただけだというのに、内と外には10度以上の気温差があった。漂ってきた静かな風でさえも熱気を孕んでいて、それだけですぐにじつとりと汗ばんでくる。

今までの夏も、これほど暑かっただろうか。

というよりも、そもそも今はまだ夏といえるのだろうか。

動かない彼を無視し廊下へと踏み出しながら、少しずつ暑さのせいで思考が麻痺し始めているのを感じる。

すでに萎え始める心の片隅で、気象も異常なら私自身もいつもよりは少し異常だと、ぼんやりと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4256o/>

魔法使いと星読みの晚餐

2010年10月20日23時48分発行